令和7年度版「学力向上ポートフォリオ（学校版）」【本太小学校】

① 今年度の課題と学力向上策

	学習上・指導上の課題		学力向上策【実施時期・頻度】
知識・技能	＜学習上の課題＞ R6年度市学習状況調査の結果から全体的に学力は高い傾向が見られるが、個人差が大きい。 ＜指導上の課題＞ 個々の学習状況を把握し、個に応じた指導方法について工夫・改善していく余地がある。	⇒	導入の工夫や個別最適な学習を軸とし、知的好奇心を高めるような授業づくりを推進する。【学期末・学期に1回計3回：共有・見直し・改善】 スクールダッシュボードを活用しデータを蓄積したり、意図的・計画的な設問等による振り返りの時間を確保したりする。また、ルーブリック評価を活用するなど児童の学習状況を把握し、指導に生かす。【通年・振り返りは学年の実態に応じて設定。単元末には必ず実施】
思考・判断・表現	＜学習上の課題＞ 国語、算数において、相手の意図を汲み取って聞くことや書くこと、場面設定から状況を想像して問題解決する力に課題が見られる。 〈指導上の課題〉 教科横断的に「話す」ことだけでなく、「聞く」ことに重点をおいた指導の充実。	⇒	話合いの視点を明確にしたり、相手意識をもたせたりする。その際、「聞く」ことに価値を見出せるように働きかける。また、場面を図に整理したり活用したりして、根拠をもって視覚的に説明できるよう指導していく。 協働的な活動において、教師がどのように関わることが効果的なのか検証していく。【通年・学期に1回計3回：共有・見直し・改善】

② 全国学力・学習状況調査結果について（分析・考察）

知識・技能	どの教科（国語・算数・理科）においても全国・県平均の正答率を上回った。しかし、算数の「変化と関係」及び「図形」の領域、理科の「エネルギー」を柱とする領域の「電気に関する」設問の正答率は低かった。また、「将来の夢や目標はもっていますか」の設問では、全国・県平均ともに肯定的な回答が下回った。学習で得た「知識・技能」は、身近な職業や生活と結びつくことや、児童の「なぜだろう」を引き出し、気付きから学習を深められるように授業改善を進めていく。
思考・判断・表現	どの教科（国語・算数・理科）においても全国・県平均の正答率を上回った。一方、国語では、「目的に応じて文章と図を結び付けるなどして、必要な情報を見付けること」に関する設問で正答率が低かった。算数では、解答の根拠を式や言葉、図を用いて記述する設問において正答率が低かった。読み取った情報を整理し、各教科の特性に応じた「専門用語」を活かして説明したり、書いたりすることができるよう、より一層指導を工夫していく。

③

	中間期報告		中間期見直し
	評価（※）	学力向上策の実施状況	学力向上策【実施時期・頻度】
知識・技能	B	学年の実態や教科の特性に応じて、朝学習や授業の中でICTを活用し、一人ひとりの課題に応じた学習機会を保障するすることができた。児童が自らの学びを自覚できるような、振り返りの時間を学年の実態に応じて設定しているが、データの蓄積による児童の実態把握やルーブリック評価の効果については、今後も検証していく。	変更なし
思考・判断・表現	B	各教科において、相手意識をもって表現することを指導した。その際、よい「話し手」や「聞き手」の姿を具体的に示し、価値づけるように指導を工夫した。引き続き、根拠をもって相手に伝わるように話す力や、相手の意図を汲み取りながら聞く力を学年の発達段階に応じて指導していく。	変更なし

※評価　A 8割以上（達成）B 6割以上（おおむね達成）C 6割未満（あと一歩）

④ さいたま市学習状況調査結果について（分析・考察）

知識・技能	市学調の結果から、計算・図形・資料読解・漢字・文章力など、学習の基盤となる知識・技能が全学年で安定して定着していることが大きな成果であった。一方で、算数の「変化と関係」や理科の「エネルギー」を柱とする領域では、正答率の伸び悩みが見られ、個人差も大きい傾向にあった。児童が既習事項を活用しながら新しい内容を結び付けて理解する力を高めるためには、個別最適な学習機会の充実と既習事項を可視化し、理解を促す工夫が必要である。
思考・判断・表現	市学調の結果から、全学年を通して理由付けや根拠を示した説明が十分にできないという課題が共通して見られた。国語では、目的に応じて相手に伝わるように理由や事例を挙げながら理由や事例などを考えることに課題が見られた、また、算数では、式や図を用いた根拠記述、理科及び社会では、複数資料の比較による結論づけに課題があることが分かった。聞く姿勢や相手意識をもった対話の不足も影響しており、話す・聞く・書くを統合した思考の言語化を学年の発達段階に応じて工夫していく。

⑤ 学力向上策の実施状況

	評価（※）	
知識・技能	B	「知識・技能」の向上に向けて朝学習の時間確保やICT活用を組み合わせ、個に応じた学習機会の確保を進めている。また、ルーブリック評価や振り返り活動を計画的に取り入れ、児童一人ひとりの学習のつまずきを確認し、補充的な支援につなげている。データに基づく学習状況の把握も進んでいるが、評価データの分析と指導改善の即時性については、今後もさらに検証してく必要がある。
思考・判断・表現	B	「思考・判断・表現」の向上に向けて、対話的な学びを重視し、話し手と聞き手の役割を明確にした指導を進めている。授業では、根拠に基づく説明を促すために教師がモデルとなって価値づけを行い、図や表を用いて思考を可視化する活動が定着しつつある。児童同士の関りや交流場面では、質の向上に向けて継続して指導する。

※評価　A 8割以上（達成）B 6割以上（おおむね達成）C 6割未満（あと一歩）

⑥ 次年度への課題と学力向上策

知識・技能	全体的に基礎的・基本的な知識の定着を図ることができている。一方で、特定の領域に対して課題が明らかになった。特に算数の「変化と関係」や「図形」、理科の「エネルギー領域」など、概念理解と技能活用が求められる学習において、基礎から応用へつなぐ体系的な指導が課題となる。より一層個に応じた支援の強化と「学びの指標」や「市・全国学力調査」等のデータに基づく授業改善を進めることで児童の理解を積み上げていく。
思考・判断・表現	相手意識をもち、根拠をもって伝えようとする児童が増え、「聞く」ことのよさに気付き、相手の話を真剣に聞こうとする児童も増えた。一方で、複合資料の読み取りや自分の考えを整理し理由を添えて説明する力等には課題がある。今後はより一層、相手意識をもった発信・傾聴の習慣化や教科の特性に応じた専門用語を正しく使いながら表現できるよう児童の育成を目指して指導していく。